

「Versus 参加レポート」

勤医協中央病院 船山和光

2014年5月17日に東京のタワーホール船堀にて開催された、第12回マルチモダリティーシンポジウム“Versus”に参加しました。

この“Versus”は、一つのテーマ（領域や疾患）に対して様々なモダリティーからの視点で議論を行うのが特徴で、一般的なモダリティーごとの研究会とは一線を画するものです。

今回の“Versus”は、胸部腫瘍性病変をターゲットに、“発見、追跡、そして撲滅へ！”をテーマに、ディスカッションが行われました。まず、一般撮影、CT、MRI、核医学の各モダリティーそれぞれの視点からのシンポジウムがありました。

一般撮影では、画像の形成から診断までの過程は「撮影」「記録」「検出」「認知」からなるモデルに基づき胸部X線画像が成り立っていると述べられていました。特に胸部X線画像は、安価で簡便、比較的低線量ということで、「追跡」を目的とした経過観察には最適と述べられていました。

CTでは、装置の進歩にともない胸部CT検査の質が向上したこと、我が国では諸外国よりCT普及率が高いことから誰でもCT検査が受けられる（受けやすい）環境が整っていること、それが、低線量肺癌CT検診が多くの施設で試みられている要因の一つであることが述べられました。低線量肺癌CT検診は、死亡率減少効果の有無を判断する証拠が不十分であるというのが現状ですが、早期肺癌発見の報告も散見するのも事実であるようです。しかし、良性腫瘍も多く発見されるため、その診断や経過観察が適切に行われる必要があることが述べられていました。

MRIでは、従来は胸壁浸潤や縦隔浸潤を伴う肺癌の診断に限定的であったが、近年ではDWIやSTIR法を用いた主病変（T因子診断）およびリンパ節（N因子診断）の良悪鑑別、viability評価、治療効果判定や予後予測の有用性、また、DWIを含めた全身MRIによる好発転移部位の診断（M因子診断）についても有用性が報告されていると述

べられました。

核医学では、主に PET について述べられていました。肺癌の病期診断では通常用いる CT に加えて PET を追加することで正確に病変の広がりを把握でき、適切な治療方針の選択が可能となると述べられていました。

いずれも大変興味深い内容でした。

その後、トピックスとして光イメージングの可能性について述べられました。特別講演では、呼吸器外科における画像支援と題して、主に肺移植について京都大学の陳先生よりお話を頂きました。陳先生は、この講演会の直前に、ドナーである夫の右下葉をレシピエントである妻の左肺として移植する、世界初の生体肺移植を成功させたばかりという奇跡的なタイミングでした。肺移植には 3DCT volumetry や 3DCT-A を積極的に利用していると述べられていました。また、経過観察にも 3DCT が用いられたとのことでしたが、その中で大変興味深かったのは、移植された肺が時間とともに胸郭にあった形に変化していき、さらに 3DCT で体積測定するとサイズも大きく変化するということでした。先生はその原因についてはまだ分かっていないとのことでしたが、もしかすると再生しないとされていた肺細胞が再生している可能性も否定はできないと述べられました。現在原因究明中とのことでしたので、今後の動向が気になるところです。

いろいろな視点から物事を見ることができる“Versus”は大変興味深く、勉強になります。皆様も機会がありましたら、ぜひ参加してみてください。